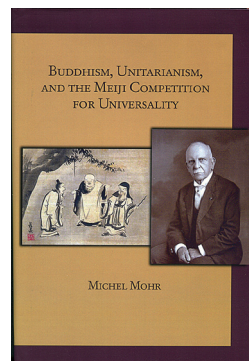


ミシエル・モール著

『仏教とユニテリアン、普遍性をめぐる明治期の競争』

Michel Mohr: *Buddhism, Unitarianism, and the Meiji Competition for University*.
Harvard University Asia Center, 2014

吉永進一



明治半ばから、アメリカのユニテリアン、ユニバーリスト（宇宙神教、あるいはドイツ由来の普及福音教会という、新神学と呼ばれたリベラルな宗派が日本のキリスト教界を席卷している。なかでもユニテリアンは、日本での伝道期間は一八八七年から

一九二二年と短いにもかかわらず、初期の宣教活動を福澤諭吉が支援したことや、社会主義研究会、友愛会から同盟へと続く、日本の社会主義、労働運動の基礎を作ったこともあり、日本での研究は少なくない。目立ったものだけを挙げて、ユニテリアンと宗教学の関係についての先駆的な著作である鈴木範久『明治宗教学潮の研究』（東京大学出版会、一九七九）、同志社大学人文科学研究所とその関係者による『六合雑誌』の研究』（教文館、

一九八四）などの業績、そして最近は土屋博政によつて『ユニテリアンと福沢諭吉』（慶應義塾大学出版局、二〇〇四）をはじめとして精力的に研究が進められている。

本書は、釈宗演の研究で知られる仏教学者による研究であり、英語圏への読者にはおそらく初めての本格的な紹介となるだろう。前述の日本語研究文献にもよく目配りした研究であり、ユニテリアン運動に関しては、まとまりの点で日本の先行研究と比べても遜色ない。

本書の第一部から第三部七章にかけては、ユニテリアン運動の軸となる個人に焦点をあて、運動の盛衰の歴史的叙述である。開拓者アーサー・ナップ、黄金時代をもたらしたクレイ・マコーレー、

そして日本伝道に幕をおろしたジョン・B・W・デイというアメリカ・ユニテリアン協会から送られた三名の宣教師については、アンドルー・神学院に残されたユニテリアン資料を参照しつつ手堅く叙述されている。日本人ユニテリアンについては、神田佐一郎、佐治実然、岸本能武太、安倍磯雄、廣井辰太郎、内ヶ崎作三郎、鈴木文治などの主要会員がとりあげられ、宗教運動から労働運動というユニテリアン研究の定説にそつて語られる。古河老川、村上專精といった伝教者へのユニテリアンの影響も論じられている。ただし、これらは日本人読者にとつては必ずしも目新しい話題ではない。

本書の特徴は、こうしたユニテリアン通史だけでなく、タイトルに「普遍性をめぐる明治期の競争」とあるように、八章、九章、エピローグの部分で論じられる、普遍性、諸教融和といった宗教思想の歴史的行方にある。十九世紀末から二十世紀初頭の日本ユニテリアンは、元伝教者が活躍し、キリスト教中心主義を超えていた運動であつたが、一方でアメリカのユニテリアンは宗教の普遍と諸宗教の協調を主張しながら、自宗教を優位に置くという二面的な性格があつた。本書には、それを端的に示す興味深いエピソードが紹介されている。一九二〇年、アメリカ、ボストンで開催された国際宗教自由派会議における内ヶ崎作三の不満である。会議に出席した内ヶ崎は、壇上で議論する代表者がアメリカ人と

イギリス人だけであることに憤慨し、同じく不快感を抱いたヨランダと徹夜で語り合ったという。「普遍」といいながら、アングロ・サクソンを優位に置く、当時の英米ユニテリアンの限界を示す逸話である。ただし、このような戦略的な利用はキリスト教だけではなく、仏教側も同様であつた。著者は、こうした二枚舌に對して批判的な態度をとりながら歴史を叙述する。

八章では、佐治実然と廣井辰太郎を軸に、日本のユニテリアンの諸教包含的な方向、いわば実践的な「普遍性」を追跡している。日本のユニテリアンは、一八八九年、大内青巒門下で、尊皇奉仏大同団などの政治活動や講演活動で知られた元大谷派僧侶、佐治実然が参加すると、中西午郎、平井金三らの改革的伝教活動家が参加している。とりわけ一八九四年から一九〇九年、佐治実然が協会長を勤めていた間は、仏教にも門戸を開き、社会主義にも接近するなど急進的な運動であつたといえる。しかし、一九〇九年に一時帰国していたマコーレーが再度来日すると、マコーレーのようなキリスト教的ユニテリアンと、諸教包含的なユニテリアンとの間に対立があり、後者がユニテリアンを去り、廣井辰太郎は佐治の路線を引き継いで日本的ユニテリアンを継続しようとするが、彼の試みは短期間で途絶している。

九章では仏教側から「普遍性」を唱えた釈宗演の例が引かれている。ユニテリアンと釈宗演の関係と對比という研究は、この著

者ならではのアプローチである。釈宗演はシカゴでの万国宗教会議から帰国後の一八九六年に宗教懇談会を開催している。著者は、釈の言説については批判的であり、釈とマコーレーの「普遍」は、いずれも自らの宗教を優位におくための戦略的なものであったと総括している。そしてエピソードでは、ユニテリアンの「普遍性」という概念が空虚であったこと、しかしそのために利用されやすかったと指摘される。著者は「普遍性」にあたるアジア宗教の概念などを丹念に検討し、その意味範囲が理解されていなかったために、さまざまな誤解をもたらしたと述べ、以下のようにユニテリアンと仏教側の戦略的利用をまとめている。

「ユニテリアンは、最初の懐柔的な調子ものから、マコーレーのキリスト教伝統の最終的「勝利」への希望を表明したものであるが、彼ら自身の「普遍性」に固執した。このレトリックを採用した仏教者の一部は、別の普遍性を定式化した別の知的背景に気づいてなかったのか、あるいは西洋版の普遍性を私用していることを認めたくないのか、ユニテリアンと同じく彼ら自身の前提に対して無批判であった」（二五三、二五四頁）

このような批判的な事実認識の上にたちながら、著者は普遍性

をめぐる議論を打ち切ろうとはしない。普遍的真理への素朴な信仰と、ポストモダンニズム的な批判との間の中間領域で、議論を続ける必要性を主張して、この本を締めくくっている。この慎重な物言いの中に隠された実践的提言は、著者の「普遍性」への信頼を映したものといえる。この点については、宗教学者としては共感せざるをえないであろう。程度の差はあれ、なんらかの普遍性への信頼が学的営みを支えているからである。

以上、これだけで結論としては、労多かつたと思われる研究に対して礼を欠くかと思われる。最後に、本書でとりあげられたいくつか指摘しておきたい。ひとつは、ユニテリアンに関わった仏教活動家、中西牛郎である。最近の研究では、中西は、井上円了と古河老川の間に位置して、新仏教の具体的な方針を定めた人物としてその重要性が再評価されている。また宗教的普遍性と比較宗教学をつなぐキーパーソンでもある。次に、その中西に刺激を与えた神智学の存在である。普遍への競争という点では神智学を無視するわけにはいかないだろう。神智学は、キリスト教中心主義を脱しなかった当時のユニテリアンと異なり、東洋思想を優位に置いたもうひとつの西洋発の普遍主義であった。神智学に関連して、古河老川については、ユニテリアンだけでなく神智学からの影響がかなり大きいことが最近指摘されている。本書はユニ

テリアンを軸に置いたので神智学についての記述は限られているが、日本の仏教を軸に置いた場合、神智学は無視できない。一方、平井金三への神智学の影響については考察の余地がある。平井の唱えた普遍主義は、神智学に刺激されたとはいえ、同時に心学の

伝統を踏まえているからである（なお本書では、平井が松村介石の助けを借りて道会を創設したという記述があるが、道会は松村が中心となつて設立したものである）。この普遍主義における伝統と近代の問題は、著者が本書の末尾で多少触れてはいるが、いまだ十分に考察されていない重要な問題かと思う。しかし、本書で最も物足りない点は、ユニテリアンと組織をあげての交流があつた新仏教運動について、ほとんど言及されていないことである。新仏教、ユニテリアン、社会主義の關係と人脈が無視されているのは、手堅くまとめられた本書の数少ない欠点であろう。キリスト教ユニテリアンと対立した廣井辰太郎も『新仏教』誌の常連寄稿者であり、彼が「日本ゆにてりあん主義確論」を発表したのは一九〇九年の『新仏教』誌上であつた。他方、諸教融合ということで、万教同根を唱えた大本教については筆が及んでいるが、これは説明不足の嫌いがある。大本教を含む日本宗教の諸教融和的傾向は、かなり広く見られ、戦後においても、いろいろな普遍主義的運動がある。とはいえ、大本教とユニテリアンを「普遍性」という同一地平で論じることが刺激的な試みであり、今後の展開が期待さ

れる。いずれにせよ「普遍性」に関する宗教言説をめぐっては、今後さまざまな研究者による国際的な研究が期待されよう。その際にこの一冊はよき出発点となるであろう。